

第2次岩倉市環境基本計画キックオフフォーラム報告レポート

2023年7月10日（月）14:00～17:00、第2次岩倉市環境基本計画キックオフフォーラムをアデリア総合体育文化センター多目的ホールで開催し、市内事業者、環境に関わる市民活動団体、市民の皆さんが参加されました。

このフォーラムは、令和4年度に策定した第2次岩倉市環境基本計画を理解していただくと共に、参加者相互のコミュニケーションの機会を創出し、これからのマルチパートナーシップによる環境保全等の活動につなげることを目的に実施しました。



1. オープニング

初めに、全体の司会進行である環境保全課岡田主任より挨拶とキックオフフォーラムの開催目的についての説明を行いました。

次に、久保田桂朗市長から挨拶。「地球温暖化、生物多様性の問題、海洋汚染、食品ロスなど、環境問題は山積みしている状況。本市では令和5年3月に第2次環境基本計画を策定し、令和14年度までの10年間を計画期間としております。今回の計画には、様々な施策が盛り込まれており、いずれも、マルチパートナーシップで進めていくということを重要視しております。マルチパートナーシップとは、市、市民の皆さん、地域の皆さん、企業の皆さんなど、まちづくりを担う主体が連携して取り組んでいくことを意味しています。計画をいかに実現させていくか、これからが重要です。市としても、特別にプロジェクトチームを編成して環境問題に取り組んでおります」と、環境問題へ真正面から取り組んでいくこと、また、マルチパートナーシップを重視していくという思いを話しました。



2. 第2次岩倉市環境基本計画の概要

環境保全課今枝統括主査より、第2次岩倉市環境計画の概要について説明。

初めに、計画の基本理念は『五条川の恵み 未来へつなぐ 人と環境』であること、この基本理念を実現するための基本方針として、『基本方針1 脱炭素社会の実現』、『基本方針2 循環型社会の構築』、『基本方針3 自然との共生と生物多様性の保全』、『基本方針4 安全・安心・快適な生活環境づくり』を設けていること、それぞれの基本方針に施策を掲げて取り組んでいくことについて説明。

次に、地球温暖化対策実行計画（区域施策編）として、本市域から排出される温室効果ガスの削減について目標を示していること、その達成に向けた取り組みを推進するために、照明器具のLED化や緑のカーテンの設置など、市民や事業者に期待される取り組みについて具体例を掲載していることを説明。

また、本市の生物多様性地域戦略として、自然との共生や生物多様性の保全についての目標を示していること。達成に向けて、地産地消の取組や、太陽光発電システムの導入など具体例を掲載していることを説明。

最後に、今回の計画の大きな特徴であるマルチパートナーシップについて話しました。

「この計画を推進するためには、マルチパートナーシップによる取り組みが必要不可欠だと考えています。行政だけ、企業だけ、市民だけなど、個々で取り組めることももちろんありますが、市民、企業、学校、行政など、それぞれの主体ができること、得意なことを出し合いながら連携し、一緒になって取り組んでいくことが必要です。」



3. 先駆的なエコ企業の事例報告

一般社団法人地域問題研究所の加藤さんが進行役となり、先駆的な取り組みをしているエコ企業の事例報告が行いました。

初めに、大橋運輸株式会社の鍋嶋洋行社長の発表『健康経営とSDGsで社員のモチベーションと企業価値up』がありました。



瀬戸市に本社を置き、法人輸送、引越し、生前整理、遺品整理などを事業として行う同社は、『仕事を通じてお客様や地域に貢献する』を理念とし、その理念の実現のために『社員を育み、付加価値を提供できる人材を蓄える』という人事理念を掲げています。

「運輸業は、事業者数が増加しているにもかかわらず国内の輸送量は減少傾向。価格競争が激しく厳しい業界です。また、日本の人口減少は今後も続くという環境下で、会社としてサービスや付加価値を高めることが求められていると判断し、10年前から、4つの取り組みを進めています。

一つ目は、女性・外国人・障がい者・LGBTなどが活躍できる環境を整えるダイバーシティ経営。

二つ目は、ビジネスモデルの強化。

三つ目は、朝食の無料配布・禁煙を促す・歯の治療を促すなどの健康経営を実施する社員満足の向上と採用力の強化。

四つ目は、オオサンショウウオ保全、河川への産業廃棄物の除去や小学生の交通安全教室、健康セミナーなどの地域活動です。

取組の結果、新卒採用に活きていたり、地域活動の幅が広がっています。

今後、2025年問題や、地域包括ケアシステムの独自モデルとして、少しでも役立てたらと思っています」との話もありました。

第2次環境基本計画策定の検討委員長である日本福祉大学千頭特任教授から、「大橋運輸の事例からは、環境、経済、社会への取組が好循環していることが感じられました。社長がこれだけ先頭に立って動いている会社はそんなに多くない。社長の想いが社員を動かしていると実感しています。これからも頑張っていたきたい」とコメントがありました。



次に、『石塚グループのCO2排出量削減への挑戦！』というタイトルで石塚硝子株式会社脱炭素ワーキンググループの杉浦昭宏さんから発表がありました。

同社は、本市に本社を置き、びん・ガラス食器、紙容器、陶磁器などの食品容器を製造しています。売り上げの多くを占めているのは、PET用プリフォームというペットボトルになる前の形をしたもの。製造の工程において、1300度の溶解炉を365日燃やしているため、ガスと電気の使用量がかなり多いのが現状です。杉浦さんは、気候変動の危機を、『名古屋市の1900年から2020年

の年間平均気温の推移グラフが3度近く上がっている』という身近な例で紹介し、CO2 排出削減が急務であると説明しました。また、CO2 排出削減においては、事業者自らによる温室効果ガスの直接排出だけでなく、他社から供給された電気等の使用に伴う間接排出、原材料調達、輸送、廃棄などサプライチェーン全体を考えて取り組む必要があると話しました。

「我々は、昨年、この先10年の中期経営計画を作り、3つの重点ポイントのうちの一つを『環境と調和した持続可能な未来社会への貢献』としました。その中のCO2 削減目標として、『2030年度までに、CO2 排出量マイナス50%削減(2015年対比)』を掲げました。その実現のために、『社員一人ひとりが、毎年1%の省エネを実現するために考える』、『全社としての脱炭素施策』、『認証取得、低CO2事業への挑戦のアイデア募集』の3つに取り組んでいます。

具体的に、現場レベルでは、コンプレッサーのエア漏れを改善して省エネにつなげたり、回収したペットボトルを原料にしてプリフォームを作ったり、溶解炉の修理の際に熱効率の最適化を図ったりといった取組を進めています。実は数年前まではこのような動きは少なかったのですが、容器業界の上流からサプライチェーン全体にCO2 削減の取り組みが広がってきたことで、色々な情報を収集しながら進めているという状況です」と話しました。



千頭特任教授から、「本当に色々なことに取り組んでみえることに感心しました。石塚硝子は、地元の卵加工会社から副産物として日々発生し多くが廃棄物となっている卵殻に着目して、ガラス製造における炭酸カルシウム原料(石灰石)代替としての産業利用を初めて実現されたという実績があって、こちらに関しても素晴らしいと感じています」とコメントがありました。

事例報告の最後に、株式会社加藤建設経営企画室自然環境課の久坂耕さんが『“エコミーティング”で、社員ぐるみの生物多様性の取組』というタイトルで発表しました。

同社は愛知県海部郡蟹江町に本社を置く総合建設業。『自然との共生』を目指して、『エコミーティング』という活動をしています。工事現場の自然環境にどんな配慮ができるのか、アイデアを出し合うのがエコミーティング。アイディアを出すためには、専門知識が必要だということで、『ビオトープ管理士』の資格取得を推進しており、現在、約360名の社員のうち約200名がこの資格を有

しています。

これまでにエコミーティングを元を実施された工事現場には、『事前に環境調査を実施して、その情報を地域住民に向けて掲示板に表示する』、『水路の改修工事で、在来種を安全な場所へ放流する』、『田んぼの工事で希少種を保護する』、『産廃処理場の工事で、伐採予定だったエノキを残し、鳥などの生態系を維持する』などの事例があります。また、同社の本社周辺での外来生物や外来植物の防除・駆除活動にも取り組んでいます。他にも、自社ビオトープを有し、地域の小学校の課外授業、新入社員教育の場として使っています。

「地域との協働ということで、尾張西部生態系ネットワーク協議会の幹事団体と事務局を務めさせていただいています。なごや環境大学にも登録し、夏と冬の2回、環境についての講座を行っています。小中学校での出前講座、大学での講義などでは、建設業が取り組む自然環境活動について紹介させていただいております。建設業は自然環境と近いところで仕事をしている業種ですので、できることを少しずつ行うことで自然との共生を広げていきたいと考えております」と話しました。

尾張西部生態系ネットワーク協議会長谷川会長から、「工事の現場にいる企業が、事例紹介のような自然に配慮した動きをしてくださっているというのは、非常に心強いと感じております。生物多様性、種の絶滅については、危機的状況にありますが、なかなか認識が広がっていません。一人ひとりができることがあるということを加藤建設さんと一緒に広げていきたいです。加藤建設さんは、昨年度、愛知県の『あいち生物多様性企業認証』の優良認証を取得されています。本日お集まりの企業の皆さんも、ぜひ認証を取っていただければと思います」とコメントがありました。

4. シェアタイム&質疑応答

同じテーブルに着席している2、3名でグループを作り、3社の事例報告を聞いた感想共有と、質問を考える時間を設け、その後、質疑応答を行いました。





質問 1：企業で取り組んでいくことへの意識が、社員全体に浸透していると感じました。担当社員だけ、興味のある社員だけが参加するという風になることが多いと思うのですが、どのように全社の取り組みにしたか、コツがあれば教えてください。

大橋建設：健康経営、ダイバーシティ、地域活動など、取り組んでいく上で必ずトラブルがあります。トラブルがあった時でもトライアンドエラーを繰り返して、とにかく継続することが大切です。担当の人だけが頑張るのではなくて、総務や経営層も、全体でやる。また、社員が地域セミナーをやっているのですが、最初は「人前で話せないから嫌だ」ということで、一つのセミナーの中で複数の社員が話すことから始めました。今では一人で何百人もの方を前にして話す社員もいます。このように社員の負荷を小さくするというのもいいと思います。また、『意識を変えるには知識を高める』を大切にして、情報提供に力を入れています。

石塚硝子：我々も道半ばではありますが、わかりやすいワードで言い続ける、『全社 1 パーセント』を繰り返して、社員の皆さんに浸透させていくということをやっているところです。

加藤建設：ビオトープ管理士の資格取得を推進することで、普段の会話の中にその資格の話が出るようになりました。また、社内報を毎月出すことで、意識が高まっていると思います。私たち自然環境課が、さまざまな現場で話をすることを 1 2 ～ 1 3 年続けてきて、少しずつ社内に意識が浸透してきたのかなと思います。

質問 2：環境への取り組みをスタートさせるきっかけは何でしたか。

加藤建設：建設業は、とても感謝される業種だけれど、一方で環境破壊しているのではないかという声が聞こえてきていました。「工事現場で環境や人に配慮したことを色々と考え実践することで、生き物や人々に喜んでもらえるはず」という



現会長の想いから始まりました。

* 質疑応答へのコメント

千頭特任教授コメント：企業にとって社員は本当に大事です。社員というのは地域住民でもあります。以前、超大手のビール会社の社長さんが「会社が何かトラブルを起こした際に、会社がダメージを受けるかどうかは社員の顔が地域の中でどれくらい見えているかにかかっている」とお話されていたことを思い出しました。

長谷川会長コメント：基本的に、環境問題は自分ごとになりにくい。それでも、「この花きれいだね」と褒められると人ってすごく嬉しいと思います。お互いに褒め合いながら「いい社会を作ろうね」と同じ方向を向いていく、そんな先行事例を話していただけて良かったです。

5.ブレイクタイム

10分間のブレイクタイムの前に、精神障がい者就労継続支援B型事業所さくら・ワークに勤務する精神保健福祉士の今泉さんから、バードフрендリーコーヒーと桜の廃材を利用したコースター・ストラップについて説明がありました。

「近年、コーヒー農場では、生産性を高めるために森林を切り開いて栽培を行っているところが多く、鳥が休憩を取る森林が失われているそうです。このバードフрендリーコーヒーは、鳥の生息地に配慮しながら有機栽培で生産された環境と鳥に優しいコーヒーです。お土産としてお配りしたのは、桜の木の廃材を活用したキーホルダーやコースターです。市役所が桜を管理する中で出た廃材を丹羽工務店様に加工していただき、その後私たちの事業所の利用者さんたちがヤスリがけなどをして作りました。」

6.くるま座談義

くるま座談義の時間には、参加者は6つの中から興味のあるテーマを選び、決められたテーブルに着席して話し合いをしました。1回目は15分、2回目は12分で、それぞれ異なるテーマを選びました。

テーマと、まとめの発表で出た意見は次の通りです。

テーマ1：マルチパートナーシップ

どのようにマルチパートナーシップのきっかけを作れば良いかという問いに



対して、「会社の本業とは違うことで関係を持つことで、相手に警戒心を与えずに協働していけるのではないか」、「相手の課題が何かを切り口に提案していくのが良いのではないか」という意見が出た。

テーマ2：温暖化防止対策①

「石塚硝子は廃熱をどうしているのだろう」という話題が出た。「エネルギー価格が高騰しているので、例えば農家のエネルギーとして使えるかもしれない」という話になり、そこから「ある企業にとっていらないものが、ある企業には必要なことがあり得るので、企業どうしのマッチングの場ができると良い」と提案があった。

テーマ3：温暖化防止対策②

大企業が省エネに取り組んでいるノウハウを、中小企業が共有できる場を作ってもらえると良いという意見があった。

テーマ4：生物多様性

「何をしていけば良いか分からない」という話が多くの事業所から出た。まだ生物多様性についての知識不足だという声が多く、事例発表をしていた企業への聞き取りをしてみたいといった声もあった。

テーマ5：外来生物バスターズ

オオキンケイギクを根絶する活動をしている企業や、外来生物バスターズに登録するつもりだという企業の方がテーブルに集まってくれた。

テーマ6：食品ロス対策をはじめとした廃棄物対策

食品ロスについては、「調理の時には皮付きで調理しています」や、「地産地消を意識して食品購入しています」という話が出た。市では、家庭で余っている（消費しない）食品を持ち寄り、集まった食品を有効に活用するフードドライブという取組をしている。つながりで食品ロスを解決できると良いのではないかと意見が出た。



7. コミットメント

フォーラムの最後に、参加者全員が「私は**を約束します」というコミットメントを紙に記入し、輪になって一人ずつ発表しました。

コミットメントとして以下の内容が挙げられました。（複数抜粋）

- ・SDGs を社内に浸透させること

- ・外来生物バスターズを意識して活動していくこと
- ・地域にどんな資源・事業所があるかもっと調べること、知ること
- ・地域貢献の機会を増やすこと
- ・オオキンケイギクが岩倉市内から根絶するように尽力すること
- ・廃棄物の利活用を考えること
- ・温暖化防止対策について会社としてできることを話し合うこと
- ・生物多様性の波紋を作ること
- ・在来種を知って保全すること
- ・食べ残ししないこと
- ・今日の体験を社内で共有し一歩進めること
- ・特定外来種について知識を深めること
- ・身の回りでの地道な脱炭素活動の実施
- ・環境を自分ごととして考えること
- ・マルチパートナーシップを継続すること

コミットメント発表の後、司会の加藤さんから参加者に、「座っている椅子の裏を確認してみてください」と呼びかけがあり、椅子の裏にペンが貼り付けてある参加者には、お土産として、会場内の各テーブルや受付などに飾られていた石塚硝子のガラスコップに、市内で自然観察会などを実施する岩倉ナチュラリストクラブが採取した在来種が植えられた「寄せ植え」が渡されました。

